

学校体育におけるボール運動・球技の指導に関する一考察

濱元盛正

要約

本研究は、学校体育におけるボール運動或いは球技の指導に関し、従来の授業実践等で指摘されている課題や提案を整理・確認し、学習内容として位置づけられている戦術学習の指導に関する方向性を探ることを目的とした。その結果、小学校の段階から積極的に「戦術学習」を導入するボール運動の指導に関心が寄せられていることが分かった。また、戦術学習を取り入れることにより、児童生徒がプレイの有能感を獲得し、活動そのものを楽しみ、更に、問題解決のための意思決定を行うこと等を示唆した。

キーワード：体育科教育、ボール運動・球技、学習内容、戦術学習

I はじめに

学校体育の運動領域の中で「ボール運動」や「球技」は指導しやすいといわれる場合が多い。しかしながら、実際には、多くの課題・問題が検討されなければならないことも指摘されている。以下、幾つかの意見を紹介する。

藤井(2003)¹⁾は「体育が苦手な先生にとっては、ボール運動の授業は楽なんです。やらせておけば、子どもは楽しくやっているように見えます。でも、本気で取り組むとすごく難しい」と述べている。

大貫(1994)はボールゲームの指導について「一見扱いやすい教材なのだけれど、子どもたち『みんなで楽しむ』授業をめざすと、とってむずかしい、というのがボールゲーム教材への素直な思いなのではないだろうか」と述べている。

グリフィンら(1999)は「伝統的なゲームの指導法は、生徒たちの興味を喚起するものでなかったし、ゲームのプレイ能力を向上させるものでなかった。それどころか、生徒たちに『ゲームをうまく楽しむうえで必要な技能を欠落させている』と思わせてきた」と従来の指導法に苦言を呈している。また、バスケットボールの授業を例にあげて前半の授業での指導が後半のゲームに全く生かされたいない問題にも触れている。

高橋ら(1999)²⁾は「これまでの球技授業では、実際にゲームと無関係に個々の技術が指導され、それらがまるでゲームに生かされないケースが多かった。他方では、これらの能力育成の目標を放棄して、低レベルのゲームを楽しむだけで終わっている授業も少なくない」と指摘している。

また、吉永ら(1999)は、カリキュラム論レベルでは短い単元で多数のスポーツが提供され、同じ種目が毎年繰り返し教えられてきた。また、指導方法論レベルでは、①技能向上を主体とする指導法では実際のゲームにおいてパフォーマンスを発揮できるような能力が身につかない。②作戦作りを中核に据えた放任的なゲーム中心の授業が繰り返されてきたがゲームが上手にならないという体育教師の悩みをよく耳にすると述べている。「こうした悩みや批判を背景にして、最近、学校体育のボール運動や球技の領域においては、戦術をゲームの学習の焦点とする戦術学習が注目されている」とも記している。

また、則元・林(2004,p.30)も「最近(約10年)、『作戦を考えさせる授業』や『戦術を教え

る授業』等の実践を見るが多くなった。この傾向は、1989年・学習指導要領からボール運動の特性の記述に『作戦』が使用されたことと、教科内容として『戦術・戦略』を位置づける実践が増えたことによると考えられる」と述べ、戦術学習に対する関心が高まっていることを示唆しているが、「戦術（作戦）を教える授業の成果や課題が検討されていない」と問題提起もしている。

そこで、本研究は、学校体育におけるボール運動或いは球技の指導に関し、従来の授業実践等で指摘されている課題や提案を整理・確認し、学習内容として位置づけられている戦術学習の指導に関する方向性を探ることを目的とした。

II 指業実践等で指摘される課題・提案

本章では、学校体育におけるボール運動或いは球技の指導に関し、従来の授業実践等で指摘されている課題や提案を数例収集し、整理することにした。

1. 吉田（1997）は「球技では、社会的態度の育成が一貫して唱えられ、身体的発達や個人的技術と集団的技術の習得とその調和をめざしながらも、実際はゲームをただ行わせる実践が横行するという状況を生んできた」ことと、「『目標』『内容』『教材』の関係性が曖昧であった」ことを指摘している。
2. グリフィンら（1999）は「伝統的なゲームの指導法は、生徒たちの興味を喚起するものでなかったし、ゲームのプレイ能力を向上させるものでもなかった。それどころか、生徒たちに『ゲームをうまく楽しむうえで必要な技能を欠落させている』と思わせてきた」と従来の指導法に苦言を呈している。また、バスケットボールの授業を例にあげて前半の授業での指導が後半のゲームに全く生かされていない問題にも触れている。
3. 佐藤りはハンドボールの1試合60分で一流選手でも一人平均して2分しかボールを持っていない。だけど、ボールを持たない時の動きの指導方法がほとんどない。
4. 則元・林（2004,pp.32-33）はボール運動における戦術（作戦）を教える授業の成立条件として、①戦術（作戦）とは何かの指導（学習）。②防御の指導（学習）。③ポジショニングの指導（学習）。④防御を破る攻撃の指導（学習）。⑤戦術分析の仕方の指導（学習）。⑥コートバランスの指導（学習）。の6項目を挙げている。
5. 高橋（1993）は小学校のボール運動教材に関し、「『攻防入り乱れ系』のシュート型では」ハンドボールにもっと大きな価値を与えてよいと考える。つまり戦術的行動の学習という点では、サッカーよりもバスケットボールを先に、バスケットボールよりもハンドボールが先に学習されるべきであろう」と記している。
6. 高橋（1994）は戦術的行動（作戦、コンビネーションプレイ）に着目してボール運動を「攻防入り乱れ系」「攻防分離系」「攻守交代系」の三つに区分している。その中の「攻防入り乱れ系」を更に①シュート型と②陣取り型に区分し、陣取り型の方が戦術的行動は一層大きな役割を果たすとして、「戦術的行動」という点からハンドボール、バスケットボールそしてサッカーの順に学習することを勧めている。
7. 藤井りは球技群で何を共通に教えたらいいか、それをどのように教えたらいいか、それをどのようなゲームで教えたらいいのか等についてもっと議論し現場と研究者とエキスパートがもっと一体となって追求する必要性を説いている。
8. 吉永（2006,p.1）は「陣取り型ゲームは、ボールを持って走ることができるという種目特性から、シュート型ゲームのサッカーやバスケットボールよりも技能的にやさしい教材である。

そのため、戦術や作戦を学習内容として設定しやすいともいえる」として、フラッグフットボールの授業実践を紹介している。

9. 森（2005a）は「子どもたちにスポーツの本質的な面白さを追及する自立した力をつけるためであるといえよう。子どもたちが自分たちの判断で自分たちの行動を自己決定する力の基礎や土台を形成することが戦略・戦術指導のねらいである」と述べている。また、「戦略・戦術の指導と学習はスポーツの主人公を育てるための結節点にあると思う」と結んでいる。
10. 吉永ら（1999,p.1-3）はアメリカにおける戦術アプローチの研究動向を紹介し「ゲームの戦術を教えることに焦点化したゲームの授業づくりが注目され、それは戦術アプローチと呼ばれ、具体的な授業モデルが提案されるに至っている」「研究レベルにおいて、その可能性を検証する試みもみられる」とし、「アメリカにおける戦術アプローチの動向は戦術学習を中核とした体育の授業研究に貴重な示唆を与える」等と言及している。更に、「戦術アプローチの有効性については、単に中学校・高等学校段階のみではなく小学校段階でも有効であると指摘されている」ことにも触れている。
11. 則元・林（2004,p.30）はボール運動の指導において、戦術（作戦）を教える授業の成果や課題が検討されていない。と指摘している。

以上の課題・提言をまとめた結果、小学校の段階から積極的に「戦術学習」を導入するボール運動の指導に関心が寄せられていることが分かった。戦術学習を取り入れることにより、児童生徒がプレイの有能感を獲得し、活動そのものを楽しみ、さらに、問題解決のための意思決定を行うこと等が示唆された。なお、ハンドボールが戦術的価値を有する種目であることも分かった。他方、授業における戦術学習の成果や課題の検討が必要であることも指摘されている。

Ⅲ 戦術学習と課題

前章では、ボール運動や球技の指導に関し、従来の授業実践で指摘されている課題を整理した。その結果、「授業における戦術学習の成果や課題の検討が必要である」ことがあげられた。

本章では、他の運動領域に係る戦術学習を扱った資料も収集した。それに基づき、以下のような大きな括りで「戦術学習の意義」、「戦術学習の課題」、「戦術と作戦の区分」、「戦術学習の指導」についてまとめた。今後、戦術学習の課題解決の一助としたい。

1. 戦略・戦術を教える意義

- 1) 森（2005a）は「子どもたちにスポーツの本質的な面白さを追及する自立した力をつけるためであるといえよう。子どもたちが自分たちの判断で自分たちの行動を自己決定する力の基礎や土台を形成することが戦略・戦術指導のねらいである」と述べている。また、「戦略・戦術の指導と学習はスポーツの主人公を育てるための結節点にあると思う」と結んでいる。
- 2) 長谷川（1990a）は①スポーツの試合において一定の成果を得るために必要なすべての手だてを講じることのできる能力、試合の全局面を重層的に支配する力を育てること。②スポーツの感動と主体性の形成。③スポーツの技術学的認識の深化・発展の契機を生み、理論学習の確かな基盤ができる。の3点を挙げている。
- 3) 岡出（1999a,p.53）は教科内容としての戦術を知識の体系として抽出することの必要性を説き、戦術学習の意義として、①できない原因を才能でなく学習の結果に求めることができる。②教科内容と教材・教具の関係を目的と手段の関係として明確にできる。③スポーツに対する理解を深める。④戦略・作戦・戦術をスポーツができることと一応切り離し、観る者

としてスポーツの創造に寄与するために必要な教養として明確に位置づける道が開ける。の4点を挙げている。

- 以上をまとめると、戦術学習の意義については、「スポーツの本質的な面白さを追求する自立した力をつけるため」「試合に必要な手だてを講ずることのできる能力を育てるため」及び下記の戦術学習の課題との関わりで「教科内容と教材・教具の関係を明確にできる」等が挙げられる。

2. 戦術学習の課題

- 1) 長谷川 (1990b,p.64) は「戦略・戦術指導」研究の課題として、①スポーツの戦略・戦術「内容」の「原理的・法則的」研究。②「戦略的・戦術的能力」の解明とその「形成」・「発達」法則の解明。③これらを基盤とした「実践」研究の蓄積。の3点を挙げている。
- 2) 岡出 (1998b,p.60) は戦後の戦術学習をめぐる論議の動向のなかでの成果として、戦術ベースの学習が意識されるようになったこと。また、問題点として、①戦術を意識した素材分類論と素材価値を判断する基準の欠如。②教材づくり論、授業づくり論レベルでの理論構築の遅れ。③教科内容としての戦術の体系の不明瞭さと価値の観点の不明瞭さ。の3つの課題を指摘している。

- 以上をまとめると、戦術学習の喫緊の課題として、「教科内容としての戦術の体系化」が挙げられる。実践と研究の蓄積も必要である。

3. 授業における戦術・作戦の定義

- 1) 岡出 (1994,p.507) は戦略（試合以前のトレーニングプログラム作成の時点からのかけひき）戦術（ゲーム中のプレイヤーの行動を方向付ける理論）作戦（戦略と戦術の間にある概念で、ゲームに臨む方針）と区別している。
- 2) 文部省 (1999) の小学校及び中学校の学習指導要領（体育編）の「ボール運動」「球技」では「戦術」はなく、「作戦」という用語が使われている。
- 3) 則元・林 (2004,p.32) は「作戦（戦術）は子どものレベルでは攻防の原理・原則により成り立つ複数のプレイヤーが協力する意図的なプレイという程度の理解でよい」としている。
- 4) 加藤 (2003,p.22) は「授業では、『この試合はわざと負けておいて次の試合に備えよう』というように戦略を考えることはあまりないので、ゲームに備えて計画を立てて行動を起こすこと全体を『作戦』と呼び、その作戦の中でプレイヤーが創意工夫しながら持てる技術を発揮し、ゲーム中の局面を打開する方策を『戦術』と理解する」と述べている。

- 以上をまとめると、「戦略」「作戦」「戦術」の定義に関しては4者が必ずしも同義ではなく、特に「作戦」の位置づけが明確でない。今後、検討する必要がある。

4. 戦術学習の指導

- 1) 吉永 (2006) は「ボールゲームにおいて、ゲームパフォーマンスを向上へと導くためには、ゲーム状況において生じる課題を合理的に解決していくための個人や集団の動き方(=戦術)の習得が必要になる」と述べている。
- 2) 森 (2005b) は「技術・戦術プレイの上達は空間(スペース)や時間(タイミング)をうまく生かすことができるようになることが重要な要件である」と述べている。
- 3) 佐藤 (1999) は「ルントは、ボールを所持しないものが、ボールを所持する味方と敵との関係において、『プレイができる』状況を作り出す個人戦術として、『プレイアブルである(になる)(にさせる)』ことをあげている」と個人戦術の基礎・基本としてのボールを持たない者の動きを紹介している。
- 4) 平田 (2005) は「ボールにさわることだけがボールゲームに参加してわけではない。ボー

ルにふれなくてもプレイに間接的に参加し協力している大事な動きがあることを戦術学習によって子どもたちに理解できるようになる」というボールゲームの共通の学習内容を紹介している。

- 5) 田仲 (2006,p.24) は侵入型ゲームでは、プレーヤーの数やボールを扱う部位が異なるものの、防御ラインを破る(ノーマーク)、数的優位をつくる(オーバーナンバー)や空間的優位をつくる(オープンスペース)といった攻撃戦術における共通の課題が認められる。このように、共通する戦術の課題を見いだすことによって、戦術の学習における合理性、効率性を高めることができる」とし、他のボールゲームの学習へと転移することを期待している。
 - 6) 加藤 (2003,p.24) はチームゲームにおける作戦を立案評価する局面として①ゲーム開始前に立案する作戦(戦略に基づく)。②ゲームが始まってからの作戦(戦術の確認とその組み合わせ)。の2局面があると考えている。
 - 7) 大貫 (1994) は『たてパス作戦』という『戦術』によってチーム内の役割が決まり、コンビプレイとして高まっていく状態へと子どもたちを変化させる」と述べている。
 - 8) 中川 (1994) は「最近のビデオ機器にはストップやスローモーションなどの便利な機能も付いており、・・・ビデオは現在ではスポーツの戦術トレーニングにおいてもっとも有用な媒体である」として、学校体育への導入でも大いに役立ちそうな示唆を与えている。
- 以上、戦術学習の指導という点では、①ボールを持っていないプレーヤーの動きが重視されている。②戦術学習とスポーツ種目の順序性の検討。③戦術学習の合理性・効率性の追求。④ビデオを活用した戦術学習の推奨。などが挙げられる。

以上、「戦術学習の課題」をまとめたが、長谷川 (1990b) が指摘するように、「スポーツの戦略・戦術に関する研究は、スポーツ科学研究においてまだ途についたばかりであり、戦略・戦術指導の内容と方法の解明は決して容易な課題ではない」と思われる。

IV まとめ

本研究は、学校体育におけるボール運動或いは球技の指導に関し、従来の授業実践等で指摘されている課題や提案を整理・確認し、学習内容として位置づけられている戦術学習の指導に関する方向性を探ることを目的として進めた。

その結果は次のようにまとめることができる。

1. ゲームの戦術を教えることに焦点化したゲームの授業(戦術アプローチ)は小学校の段階でも有効である。また、ハンドボールの戦術的学習にも着目する必要がある。
2. 戦術学習の意義として、「スポーツの本質的な追及する自立した力」「試合に必要な手だてを講ずることのできる能力」「教科内容と教材・教具の関係が明確にできる」などが考えられる。
3. 戦術学習の喫緊の課題として「教科内容としての戦術の体系化」とその実践・検証の蓄積が必要である。その場合、学校現場の教員と大学の教員が連携して理論に基づき実践・検証することが有益である。
4. 授業における「戦略」「作戦」「戦術」の定義と検討が必要である。
5. 戦術学習の指導では「ボールを持っていない者の動きの指導」「戦術学習とスポーツ種目の順序性」「戦術学習の合理性・効率性の追求」「ビデオを活用した戦術学習の推奨」等が注目される。

なお、児童生徒が自チームの特徴に応じた作戦をたてるためには「戦術に関する学習資料の充実」が必要であり、今後の課題としたい。

注

- 1) 藤井喜一・岩田靖・佐藤靖の座談会 体育科教育 (2003.5) : p10-17. 特集「みんなが伸びる『ボール運動』『球技』の授業」「球技の分類と学習内容を考えるーハンドボールを素材としてー」
- 2) 高橋らがグリフィン (1999) の本を翻訳した「訳者まえがき」で述べている。

参考文献

- 長谷川裕 (1990 a) スポーツの戦略・戦術問題とは何か. 体育科教育 38(9) : 60-64.
- 長谷川裕 (1990 b) 戦略・戦術指導の内容と展開. 体育科教育 38(10) : 60-64.
- 平田信也 (2005) ボールゲーム共通の学習内容が見えて来た! たのしい体育・スポーツ 24(3)6-7.
- 加藤敏弘 (2003) ボール運動, 球技の作戦・戦術をどう教えるか. 体育科教育 51(5) : 22-26.
- リンダ・グリフィンほか: 高橋健夫ほか訳 (1999) ボール運動の指導プログラムー楽しい戦術学習の進め方. (株) 大修館書店: 東京.
- 松本格之祐 (2006) ボールゲームをもっと魅力ある教材にするために. 体育科教育 54(6) : 10-13.
- 文部省 (1999) 小学校学習指導要領解説 体育編 (2刷). (株) 東山書房: 京都.
- 文部省 (1999) 中学校学習指導要領 (平成10年12月) 解説 保健体育編. (株) 東山書房: 京都.
- 森敏生 (2005a) なぜ、戦略・戦術を教える必要があるのか. たのしい体育・スポーツ 24 (3) : 25-28.
- 森敏生 (2005 b) ボール運動 (球技) の特質と技術指導の系統性を考える. たのしい体育・スポーツ 24(8) : 6-7.
- 中川昭 (1994) チームゲームにおけるビデオを使った戦術トレーニング. 体育の科学 44(7) : 550-553.
- 則元志郎・林健司 (2004) ボール運動における戦術 (作戦) を教える授業の成立条件. たのしい体育・スポーツ 23(9) : 30-33.
- 佐藤靖 (1997) 球技の分類を考える 体育科教育 45(17)26-29.
- 佐藤靖 (1999) ボール運動が苦手な子どもの指導. 体育科教育 47(16) : 66-68.
- 杉山重利・高橋健夫・野津有司 (1999) 小学校 新学習指導要領 Q & A ~ 解説と展開 ~. 教育出版 (株) : 東京, pp.136-141.
- 鈴木理 (2000) 小学校「ボール運動」領域における戦術的学習内容の構造化. 宮崎大学教育文化学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術 (4) : 1-14.
- 高橋健夫 (1993) これからの体育授業と教材研究のあり方. 体育科教育 41(4) : 18-21.
- 高橋健夫 (1994) ゲームの授業を創る. 体育科教育 別冊⑩ 42(2) : 12-18.
- 田仲雅人 (2006) ボールゲームにおける状況判断をどう教えるか. 体育科教育 54(6) : 24-27.
- 内山治樹 (2006) なぜ「サポートプレイ」に着目してゲームを構想するのかーバスケットボールを中心にー. 体育科教育 54(6) : 28-31.
- 大貫耕一 (1994) ボールゲームは指導しやすい教材か?. 体育科教育 42(14):68-71.

- 岡出美則（1994）体育科教育からみたスポーツの戦術－教科内容としての戦術とその指導方法－. 体育の科学 44（7）：507-510.
- 岡出美則（1998a）戦術学習の課題－戦術学習の対象・手続き検討の視点－. 体育科教育 46(6)：51-53.
- 岡出美則（1998b）素材主義の克服に向けた諸提案. 体育科教育 46(11)：60-62.
- 吉田文久（1997）何を、球技で教えるのか. 体育科教育 45(17)：33-35.
- 吉永武史・高橋健夫・岡出美則（1999）アメリカにおける戦術アプローチに関する研究動向についての検討. 日本体育学会第50回記念大会発表資料（演題番号11D10904）
- 吉永武史（2006）学習内容を明確にしたボールゲームの授業づくり. 体育科教育54(6)：19-23.

key words : physical education, ball exercise/ball games, learning content,
tactics learning